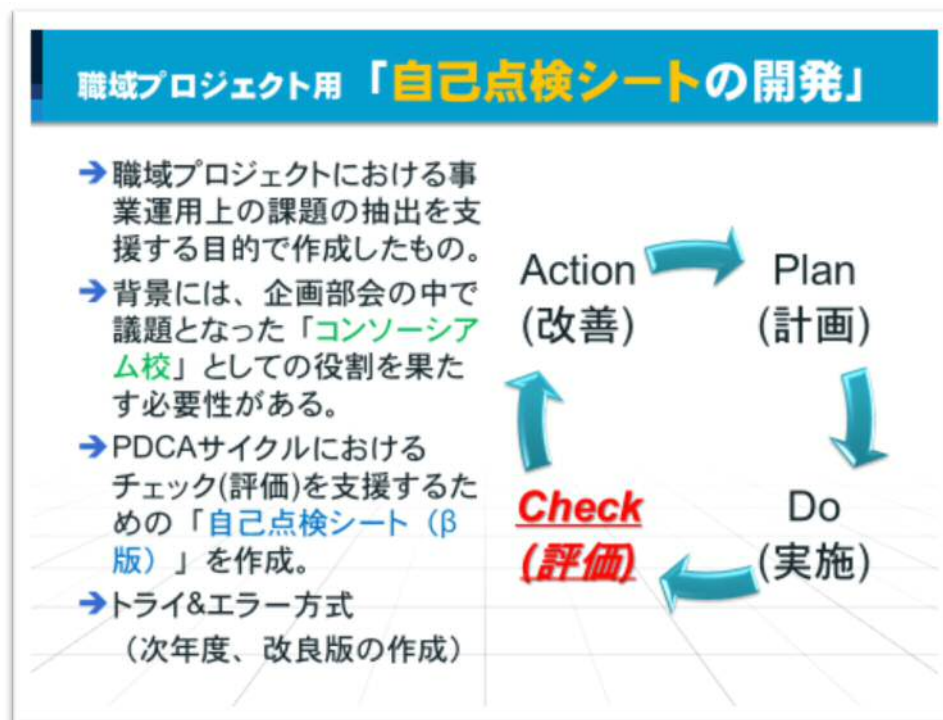


### 第3章 「自己点検シート」の開発と各職域プロジェクトの概要

#### 1. 職域プロジェクト用「自己点検シート」の開発とその経緯



今年度事業では、これまでの事業の反省や各職域プロジェクト校の意向を踏まえて、企画部会において「もっとコンソーシアム担当校としての役割を明確に打ち出す必要がある」との議論が盛んに行われた。

そこで本校では、コンソーシアム担当校として、各職域プロジェクトの取組を微力でも支援できればとの発想に至った。企画部会のなかで様々な支援方策が検討されてきた。いくつかのプランが上がったが、そのなかで、当初、本校の実施する事業の目的の1つとして各職域プロジェクト校を評価するための指標づくりが課題となっていたこともあり、今年度は、評価のための指標や仕組みの開発を実施しようということになった。

しかしながら、企画部会での議論の結果、ここで言う「評価」とは、第三者評価などにみられる客観的かつ厳密な評価ではなく(評価するための評価ではなく)、各職域プロジェクト校が各校の取組について自分たちで評価することによって、事業運営上の課題を発見し、次年度以降の取組をさらに発展させていくために寄与してほしいとの目的で実施されるものと設定して開発を進めている。名称を「自己点検シート」としたのも、本

校によるこうした願いが込められているためである。

つまり、本校が開発した「自己点検シート」に取り組むことで、各職域プロジェクト校は、今年度の事業を振り返り、課題を抽出してもらうことを目的に作成している。これはP D C Aサイクル(計画－実施－評価－改善)における評価に相当するものである。この自己点検の結果、抽出された課題を次年度以降の改善に役立ててほしいと考え、作成している。

作成した「自己点検シート」は、あくまでも暫定版(B版)であり、トライ&エラー方式で、実際に職域プロジェクト校に回答してもらい、そこでの反応を見ながら、次年度以降改善を加え、より課題点を明確化できるものとして精度を高めていく予定である。

## 2. 自己点検シートの内容

今年度開発した「食・農分野における産官学コンソーシアム 職域プロジェクトの取り組み自己点検シート」は、次ページに示している。

これをみると分かるように、A(十分に達成されている)・B(おおむね達成されている)・C(一部達成されている)・D(あまり達成されていない)・E(ほとんど達成されていない)の5段階で自己評価してもらい、その後、その評価を付けた根拠を明示してもらうという内容となっている。

この「自己点検シート」は大きく五部構成になっている。「全体の取り組み状況」に関する項目(5問)、各項が組織した「連携体制」に関する項目(5問)、今年度実施した「実証講座」に関する項目(5問)、今年度「開発したカリキュラム」に関する項目(5問)の計20問と、自由回答方式で、今年度の主な成果と改善点を聞き取る内容となっている。

4つの項目に各5問ずつ設問を設けたのは、今年度は実現することができなかったが、将来的には、5つの項目に拡大し、五角形から成るレーダーチャートとして示すことで、直感的に各職域プロジェクトの事業成果や課題が理解できるものとして発展させていきたいとの思いがあったためである。年度毎にレーダーチャートを比較することで、どこが改善できて、どこが改善できていないのかも、前年や前々年のものと比較することによって、明確に理解ができると考えている。したがって、来年以降は、全体で5項目25問に拡大・発展させた自己点検シートの作成を検討したい。

## 食農分野における産官学コンソーシアム 職域プロジェクトの取り組み自己点検シート

学校名( )

記入者(ご担当: )

職域プロジェクトの自己点検シートにおける「評価」欄には、A・B・C・D・Eの5段階で自己評価してください。今後の貴校のプロジェクトの改善および発展のために実施するものであるため、できるだけ客観的な評価をお願いします。

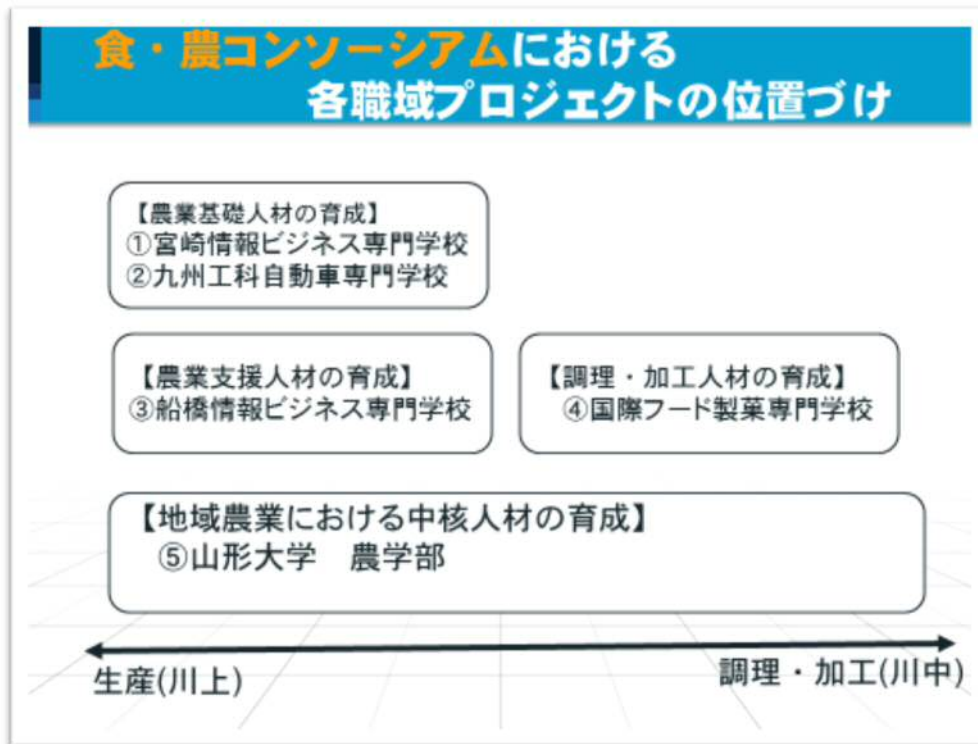
- A: 十分達成されている
- B: おおむね達成されている
- C: 一部達成されている
- D: あまり達成されていない
- E: ほとんど達成されていない

項目	評価(A-E)	評価の根拠となる事柄を具体的にお書きください
(全体の取り組み状況)		
・計画に定めた目標を達成できている。		
・提出した計画通り事業が進んでいる。		
・PDCAサイクル(計画→実施→振り返り→その反映)を意識した事業が展開できている。		
・提出した計画に沿った実証講座が開催されている。		
・提出した計画通りの教育カリキュラムを作ることが出来ている。		
(連携体制)		
・事業を推進するのに十分な実施体制を構築できている。		
・事業協力者や協力団体との連携体制が十分に機能している。		
・事業協力者や協力団体の会議の出席率(累積)は?  A: 90%~ B: 80%~89% C: 70%~79% D: 60%~69% E: ~59%		(出来るだけ数値をお書きください。)
・事業協力者や協力団体との会議は十分な回数を確保できている。		
・事業協力者や協力団体が発言した意見内容を十分に反映している。		

(実証講座)		
・実証講座では、次年度の改善に役立てるための受講生の意見聴取を行っている(アンケート、座談会等)。		
・実証講座では、実証するのに適切な受講生を確保できている。		
(参加人数 人 / 応募人数 人)		
・実証講座では、多様な受講生を受け入れるための努力をしている。(多様な年代、性別、職業など)		
・実証講座は、受講生の理解や知識の定着に促進するための工夫が十分になされている。		
・実証講座は、実証するのに十分な時間が確保されている。		
(実証講座の時間数 時間 / 開発カリキュラム時間数 時間)		
(開発したカリキュラム)		
・開発したカリキュラムは、「就労、キャリアアップ、キャリア転換に必要な実践的知識・技術・技能を身に付けるための学習システム等を構築する」という本事業の目的に合致している。(就職やキャリアアップ、転職を支援するような学習システムが構築できている。)		
・開発したカリキュラムでは、育成すべき人材像が明確になっている。		
・開発したカリキュラムは、地域の農業や食(食材・調理法)に関する内容が含まれている。		
・開発したカリキュラムには、実証講座で得た受講生の意見が十分に反映されている。		
・開発したカリキュラムは、性別に限らず男性も女性も参加しやすい工夫がなされている(託児施設の設置など)。		

これまでの取り組み評価と今後の改善点	
①これまでの取り組みによる成果を教えてください。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> 過去の年度の卒業生の進路  あるいは地域での実践、ビジネスプランの実践等  新カリキュラム、教材の開発など </div>	
②今後の改善点はなんですか。	

### 3. 職域プロジェクトの取り組み概要と自己点検シートの回答



上に示した図には、食・農分野の産官学コンソーシアムに加盟する各職域プロジェクト校の位置づけを図示している。同図では、横軸にフードシステムにおける川上(生産)から川中(調理・加工)まで各々の職域プロジェクトがカバーする範囲を示している。生産側では、農業分野における初級人材(基礎人材)の育成を目的とした①宮崎情報ビジネス専門学校、②九州工科自動車専門学校、農業をIT分野から支援する人材の育成を目指した③船橋情報ビジネス専門学校がある。一方の調理・加工側では、農産物の調理・加工による6次産業化など農業分野の発展に貢献する人材の育成を目指す④国際フード製菓専門学校があげられる。最後に、川上から川中、川下(販売)までを事業内容に含めた本来の意味での農業ビジネスにおける6次産業化人材の育成を目指した⑤山形大学農学部の5つの職域プロジェクトから本コンソーシアムは形成されている。

これ以降では、①～⑤の順で、各職域プロジェクトの取り組み概要について見ていくとともに、「自己点検シート」の回答結果についても併せて見ていく。最後に、回答結果の集計から全体的な状況について言及していく。

## ①職域プロジェクト 宮崎情報ビジネス専門学校

「農業を中心とした新しいビジネスを創出・牽引する人材の育成」

### 1) 同校の事業概要

宮崎情報ビジネス専門学校は、平成 26 年度事業で 3 年目の事業実施となっている。同校では、この 3 年間を活用して、教育カリキュラムの根幹を為す「共通基礎領域（510 コマ、765 時間）」の教材開発並びにカリキュラム開発をメインに行ってきた。「共通基礎領域」の名前の由来は、応用コースである「アグリビジネスコース」「フラワービジネスコース」「フードビジネスコース」に共通する内容となっているためであり、農業における生産から加工、販売までを含めたアグリビジネスの全体像を理解するためのプログラムである。

昨年までに、アグリビジネス・オーバービューと呼ばれるアグリビジネスの全体像を学生に紹介する教材の開発を行うとともに、その教育効果を実証するための実証講座を実施してきている。

### 2) 教育プログラムの開発

同校では、教育プログラムの開発や教材開発を行うための基礎資料とするために、インターネットを活用した情報収集を実施している。大きく「農業を活用した地位の支援に関する事例調査」並びに「農業に関連したエネルギー生産の取組に関する事例調査」の 2 つのテーマに関する事例調査を実施している。それぞれ、14 事例、6 事例のケーススタディを実施している。

こうした事例調査をもとに、平成 26 年度事業では「ビジネス基礎(150 コマ 225 時間)」、「地域の支援 (45 コマ 67.5 時間)」、「職業とキャリア (30 コマ 45 時間)」の 3 つの領域に関する教材と教育プログラムを開発している。

詳しい内容について見てみると、「ビジネス基礎」では、マネジメント、簿記、販売、コミュニケーション、e ビジネスを学ぶ内容となっている。同様に、「地域の支援」では、農業と環境、農業の地域での役割、グリー

ンツーリズムに関する内容のプログラムを開発している。さらに、「職業とキャリア」では、キャリア形成やワークライフバランス等の内容について学ぶとともに、ライフプランを作成するなど実践的な内容となっている。

### 3) 実証講座

以上のように開発した教材の有効性・妥当性を検証するために、同校では平成27年2月2日(月)、2月3日(火)の2日間(合計12時間)を費やし、宮崎県立農業大学校の学生(1年生57名)を対象とした実証講座を実施している。実証講座では、今年度開発した「職業とキャリア」に関する内容を学生に提供している。

1日目(2月2日)には、「働くこと」と「企業が求める人材」に関する講座を実証し、2日目(2月3日)には「キャリアデザイン」に関する内容について学習させている。適宜、セルフワークやグループワークなどのアクティブ・ラーニングを講座のなかに採り入れている。

実証講座の実施後には、講座の受講生に対して、アンケート調査を実施することによって教育効果の検証を試みている。このアンケートの結果、今回の実証講座によって、受講生が自身のキャリア形成について考える機会を提供することができたと判明している

### 4) 今年度事業の成果と今後の課題

同校では、平成24年から3年間の教育プログラムの開発によって、「共通基礎領域」とよばれる基礎教育部分のシラバス並びに教材開発が完了したことが、今年度事業における最大の成果である。

次年度以降は、今年度開発した「共通基礎領域」の応用科目群である3つの専門領域(「アグリビジネス」「フラワービジネス」「フードビジネス」)のシラバス作成と教材開発を行っていきたいとの意向を持っている。

また、実施委員会にて公表を得た「職業とキャリア」については、短期コース化するとともにグループワークを強化していきたいと考えている。

さらに、受講者の就職を支援するために、次年度以降は、地元の農業法人との連携大勢を強化させていく。

## 食農分野における産官学コンソーシアム 職域プロジェクトの取り組み自己点検シート

学校名( 学校法人宮崎総合学院 宮崎情報ビジネス専門学校 )

記入者(ご担当: 教務部長 岩村 聡志 )

職域プロジェクトの自己点検シートにおける「評価」欄には、A・B・C・D・Eの5段階で自己評価してください。今後の貴校のプロジェクトの改善および発展のために実施するものであるため、できるだけ客観的な評価をお願いします。

- A: 十分達成されている
- B: おおむね達成されている
- C: 一部達成されている
- D: あまり達成されていない
- E: ほとんど達成されていない

項目	評価(A-E)	評価の根拠となる事柄を具体的にお書きください
(全体の取り組み状況)		
・計画に定めた目標を達成できている。	A	今年度開発対象となっている「共通基礎領域」のカリキュラム・シラバス、及び「共通基礎領域」で使用する教材の開発・調達、事業終了までに完了する見込みである。
・提出した計画通り事業が進んでいる。	B	開発教材の検討や実証講座の検討で当初の計画よりも時間がかかったが、教材開発や実証講座の実施準備に取りかかっからは順調に進捗してきている。
・PDCAサイクル(計画→実施→振り返り→その反映)を意識した事業が展開できている。	A	実証講座が2月2日(月)・3日(火)の実施予定となっており、それによる検証が残っているが、委員会等における議論を開発に反映させることができている。
・提出した計画に沿った実証講座が開催されている。	B	当初の計画では、実施時期が1月中旬であったが、実際の実施が2月になった。その点を除くと、計画通りに実施される予定である。
・提出した計画通りの教育カリキュラムを作ることが出来ている。	A	計画していた「地域の支援」「ビジネス基礎」「職業とキャリア」のシラバスを整え、使用する教材の開発・調達が完了する見込みである。
(連携体制)		
・事業を推進するのに十分な実施体制を構築できている。	A	専門学校を中心に、大学農学部、農業大学校、農業関連団体・企業、商工業団体、自治体等、幅広い組織から委員にご参画いただき、事業を推進することができている。
・事業協力者や協力団体との連携体制が十分に機能している。	A	実施委員会の場以外でも、個別に打合せ等を持ち、頻りに意見交換等を行っている。
・事業協力者や協力団体の会議の出席率(累積)は? A: 90%~ B: 80%~89% C: 70%~79% D: 60%~69% E: ~59%	E	(出来るだけ数値をお書きください。) 実施委員会の2回分の累積53.7%(全委員数: 27名、累積出席者数: 29名)
・事業協力者や協力団体との会議は十分な回数を確保できている。	A	実施委員会以外でも、個別に打合せ等を行っている。
・事業協力者や協力団体が発言した意見内容を十分に反映している。	A	検討の上、今年度の開発対象部分で反映できるものは反映している。専門コース(「アグリビジネス」「フラワービジネス」「フードビジネス」の各コース)のカリキュラムに反映すべきものは、今後の検討課題としている。



(実証講座)		
・実証講座では、次年度の改善に役立てるための受講生の意見聴取を行っている(アンケート、座談会等)。	A(予定)	アンケートを実施する予定である。
・実証講座では、実証するのに適切な受講生を確保できている。  (参加人数 人 / 応募人数 人)	A(予定)	県立農業大学校と調整中であるが、最大で57名(1年生全員)が受講する予定である。
・実証講座では、多様な受講生を受け入れるための努力をしている。(多様な年代、性別、職業など)	A	県立農業大学校の学生に限られるが、大学校の意向を十分に踏まえ、受講者の今後の学習に活用できるような内容で実証講座を構成している。
・実証講座は、受講生の理解や知識の定着に促進するための工夫が十分になされている。	A	座学だけでなく、個人ワークやグループワークを取り入れ、受講者が自ら考え、グループで議論し、理解を深めていけるような手法を採っている。
・実証講座は、実証するのに十分な時間が確保されている。	A	「職業とキャリア」の内容を中心に実証講座を構成したが、説明の中で「地域の支援」や「ビジネス基礎」の内容にも触れる予定である。
(実証講座の時間数 6時間 / 開発カリキュラム時間数 337.5時間)		
(開発したカリキュラム)		
・開発したカリキュラムは、「就労、キャリアアップ、キャリア転換に必要な実践的知識・技術・技能を身に付けるための学習システム等を構築する」という本事業の目的に合致している。(就職やキャリアアップ、転職を支援するような学習システムが構築できている。)	A	アグリビジネスにおけるキャリアアップやライフプランについて学習する「職業とキャリア」の分野を取り入れ、ワーク中心で学習する内容となっている。その他、アグリビジネスにおける成功事例を学習する内容も含まれている。
・開発したカリキュラムでは、育成すべき人材像が明確になっている。	A	農業法人等に就職して、アグリビジネスの川上から川下まで見渡せる人材の育成を前提としたカリキュラムとなっている。
・開発したカリキュラムは、地域の農業や食(食材・調理法)に関する内容が含まれている。	A	地域における農業の事例を学習する内容を含めている。また、平成24年度からの事業全体では、「フードビジネス」を学習する専門コースも設定している。
・開発したカリキュラムには、実証講座で得た受講生の意見が十分に反映されている。		実証講座を担当した講師の感触や、農業大学校からの評価等を鑑み、教育プログラムや教材の完成度を高めていく予定である。
・開発したカリキュラムは、性別に限らず男性も女性も参加しやすい工夫がなされている(託児施設の設置など)。	A	教育プログラムの受講においては、性別による区別は特にない。託児施設等、ハードに関する事項は別途検討が必要である。
<b>これまでの取り組み評価と今後の改善点</b>		
①これまでの取り組みによる成果を教えてください。 過去の年度の卒業生の進路 あるいは地域での実践、ビジネスプランの実践等 新カリキュラム、教材の開発など		本県には大学農学部、農業大学校、農業高校等、農業関連の教育機関が揃い、それぞれ実績を上げている中で、専門学校の強みを活かし、既存の教育機関と競合しない分野での人材育成プログラムを構築し、そこで扱う教材の開発を行っている。
②今後の改善点はなんですか。		○「アグリビジネス」「フラワービジネス」「フードビジネス」の各専門コースにおける教育プログラムの充実化・詳細化 ○受講者と農業法人等との交流イベントなど、受講者の就職・就農を支援する仕組み作りなどを検討予定である。